

## その風景に 神の存在を 信じずにはいられない

大天使ミカエルが告げた奇跡の地

**モン・サン・ミッシェル** *Mont-Saint-Michel*

広大な海原に凜として立つ姿に、この世の奇跡を感じる。　ここは神の地ではないか…　そう思えてくる。

巡礼の手段が徒歩だった時代

幾日もかけて辿り着いた人たちは、この風景に神の恩寵を感じとり、長く辛い旅が報われた、と天を仰ぎみて涙したことだろう。



修道院は、カロリング朝に始まり、数百年にわたり拡張増築をくりかえしてきた。

そのため、修道院には20を超える部屋があり、ロマネスクの礼拝堂、「メルヴェイエ(驚愕)」と呼ばれるゴシック様式の宗教建築、ゴシック・フランボワイオン様式の内陣など、多種多様な建築様式がみられます。

修道院は花崗岩の崖上にそびえたつ。荒々しい岩肌は濃い錆色、修道院も同じ花崗岩でできている。

修道院と家々が混然一体となって折り重なるように建ち並ぶ。



修道院につづく狭い石畳の参道。土産物屋、飲食店、宿屋が連なり、観光客であふれかえる。

おそらく、数百年前から変わらない風景なのだろう。ここには、数百年前からヨーロッパ全土の巡礼者が訪れていたから。

## 地理的な奇跡と再生への試み

モン・サン・ミッシェル修道院は、ビスケー湾の深部、ノルマンディとブルターニュの両半島に挟まれた、クーズノン川(Le Couesnon)の河口に位置します。ここは、広大な平野にポツンと花崗岩の丘がそびえる、特別な場所なのです。

8世紀初頭、地元司教が天使のお告げで修道院を建てたという、中世の言い伝えをもちだすまでもなく、広大な平野にそびえる岩山は、それ以前から、信仰の対象だったに違いありません。



海岸近くに島があると、沖からの波が島の裏側で打ち消しあい、波の静かな箇所ができます。そこは河川や沿岸流などが運んできた砂が堆積しやすく、やがて海岸と島を結ぶ砂州(トンボロ・tombolo)が成長して陸続きとなります。満潮時には島であっても、干潮時には砂州を伝って島に渡れるようになります。

サン・マロ湾はヨーロッパで最も潮の干満の差が大きい場所として知られます。干満差は最大で15メートル以上。干満差の大きな遠浅の海は、想像を絶する速さの潮の満引きが起こります。

ヴィクトルユゴーは、「馬のギャロップの速さ」で満ちる潮と表現しました。河口に押し寄せる最初の大波は「マスカレ」とよばれ、巡礼者には、ギャロップの速さに迫る大波に呑まれた者も多かったといひます。

モン・サン・ミッシェルの島に渡ることは、長い旅の最後の試練でした。

ナポレオン3世による第二帝政時、モン・サン・ミッシェルの観光地化が始まります。満潮時にも沈まないよう砂州を盛土し、道路をつくり、鉄道まで敷かれました。この行為は潮流をせき止めてしまいました。

川の運んでくる砂が堆積することで、島の周囲は急速に陸地化し、近い将来、完全に陸続きになることが懸念されたのです。



当時の様子を伝える葉書



橋を兼ねた河口ダム



河口に堆積した砂地

1995年、再生事業が開始されます。コンセプトは、モン・サン・ミッシェル巡礼の精神に立ち返ること。それは「島に渡る」という行為の復活でした。

再生事業の中心は、連絡橋の新設と河口ダムの建設、そして、島周囲の埋立土砂の撤去でした。ダムは堆積した砂を押し流し、連絡橋は沿岸流を再生します。

数年後、モン・サン・ミッシェルは、昔の「孤島」に戻るのです。



数年後の島の姿

*Mont-Saint-Michel*  
*merveille de l'Occident*